

二〇二二年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇二二年 二月四日実施

# 国語

## 四日午前四科

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、



 ～ 



 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

一五〇年前といまの日本人の暮らしは、まったく違います。しかも一五〇年前の日本列島に暮らし続けた人びとは、もうだれ一人残っていません。日本人は、みんな入れ替わっている。それでもなお日本人や日本文化はずっと続いている。①そんな意識が私たちにはあります。

学生に「日本文化とは何ですか？」と聞くと、みんな同じように答えます。着物や華道、茶道、相撲、歌舞伎、侍、佗び寂び……。でも、教室に着物を着ている人は一人もいません。ふんどしをつけている人も、歌舞伎役者も、ちよんまげ頭の人もいません。

だれもその「日本文化」にあてはまらなくても、それらが日本人の固有の文化だと信じて疑わない。不思議なことですが、もともと武士階級の侍なんて、全人口から見ればごくわずかでし、庶民は絹の着物を身につけることが禁じられていました。極端な話、いまも昔も一部にしか存在しなかった要素であっても、日本人の文化だと考えることは可能なのです。

「日本人」というのは「器」であって、何がその「なかみ」として差異を構成するのは時代によって変化します。そうしてなかがみも変化しても、日本人という容れ物、つまり境界そのものは維持される。それは日本人ではない人たちとのあいだに境界線が引かれているからです。

もし世界中に日本人しかいなくなったら、「日本人」というカテゴリー（＝容れ物）に意味はなくなります。「日本人」は、「日本人ではない人たち」との関係においてはじめて「日本人」でいられるのです。

さらに「日本人」という境界は、つねに存在する絶対的なものではありません。たとえば、私たちはよく関西人はどうかとか、関西人のなかでも京都人はこうで、大阪人はこうだといった言い方をします。そのとき②「日本人」としてのまともりは無視されます。

「関西と関東は文化が違う」と言うとき、そこに明確な差異があることを疑う人はいません。その関西人と関東人の比較では、京都人と大阪人の違いは意識されなくなり、同じ関西人として均質な存在にされます。どういう境界線で比較するかで、「差異」そのものが変わるのです。

集団と集団との境界をはさんだ「関係」が、その集団そのものをつくりだしていく。「つながり」によって集団間の差異がつくられ、集団内の一貫性<sup>かん</sup>が維持される。

ある輪郭<sup>かく</sup>をもった集団は単独では存在できません。別の集団との関係のなかで、その差異の対比のなかで、固有性をもつという確信が生まれ、それが集団の一体感を高める。それは、「わたし」が「他者」との交わりのなかで変化してもなお、「他者」との境界線をはさんで「わたし」であり続けるのと同じです。

……中略……

私たちは他者とつながるなかで境界線を越えたいろんな交わりをもちます。それによって変化し、成長することもできません。それは③「わたし」という存在が、生まれつきのプログラム通りに動くようなものではなく、いろんな外部の要素を内側に取り込んで変わることのできるやわらかなものだからです。

「わたし」が溶ける経験を変化への受容力ととらえると、<sup>a</sup>ポジティブに受けとめられると思います。さまざまな人との会い、いろんなものをやりとりした結果として、いまの「わたし」がいる。

その出会いの蓄積<sup>ちく</sup>は、その人だけに固有なものです。だれ一人として、あなたと同じ人と同じように出会っている人はいません。「わたし」の固有性は、そうした他者との出会いの固有性のうえに成り立っている。

でもだからこそ、いまの「わたし」が不満な人は、それを悲観する必要もない。みんな気づかないうちにかつての「わたし」を捨て、こっそり他者からあらたな「わたし」を獲得しているのですから。

中学から高校に、あるいは高校から大学に入った途端<sup>とたん</sup>に、自分の<sup>b</sup>キャラクターが変わったと感じる。自分では意識していなくても、友だちからそう言われたり、友だちのそんな変化を目にしたりする。そういうことは、よくありますよね。

クラス替えがあつて自分を取り囲む人が変わるだけでも、自分が変化したように感じる。それは「わたし」という存在が周囲の他者によって支えられ、つくりだされているからです。

そもそも④ 私たちは複数の「わたし」を生きています。たとえば、家のなかでは末娘<sup>むすめ</sup>として「甘えんぼう」と言われている人でも、部活では頼れる先輩<sup>せんぱい</sup>として後輩に慕<sup>た</sup>われているかもしれない。大学の授業では「生徒」として教室でおとなしくしている人が、バイト先の塾<sup>じゅく</sup>では「先生」と呼ばれ、黒板の前で堂々と話をするかもしれません。

私たちは、つねに複数の役割をもって生きています。それは、だれと対面するかによつて、「わたし」のあり方が変化しうることを意味します。家族のなかの「末娘」は、「親」や「兄弟」との関係においてあらわれる「わたし」のあり方。部活の「先輩」は「後輩」との関係抜きには存在できません。先生と生徒も同様です。「生徒」の存在によつて、その人は「先生」であることができる。

このようにすでに私たちは状況に依じて複数の「わたし」を生きています。そのどれがほんとうの「わたし」なのでしょうか？

人前では期待される役を演じていて疲れる。家に独りでいるときの自分が気楽でいい。そう思う人もいるでしょう。でも、だれとも関係を結ばない「わたし」が、ほんとうの「わたし」と言えるのか、ちよつと考えてみてください。すべての演じるべき役を脱ぎ去ったあとに、演じない本当の「わたし」がいるのか、いたとしてそれにどんな意味があるのか。これは考えるに値する問いだと思います。

「アイデンティティ」という言葉があります。「自己同一性」と訳されますが、自分がつねに同一の存在であり続けるというのは、まさに近代の個人主義的な人間観です。演じる役をすべて脱ぎ去ったあとに、同一の揺るがない核のような「わたし」がいる。そんな見方に通じます。

小説家の平野啓一郎（一九七五〜）は、複数の自分の姿をたんなる「キャラ」や「仮面」のようなものと考えてはだめなんだと言います。たったひとつの「ほんとうの自分」や首尾一貫したぶれない「本来の自己」なんてない。一人のなかに複数の「分人」が存在しているのだと、本書の内容とも通じる議論を展開しています（『私とは何か 「個人」から「分人」へ』）。

英語の「個人 individual」は、「分割できる dividual」に否定の接頭辞「in」がついている語で、それ以上分割不可能な存在という意味が込められています。<sup>⑤</sup>この西洋近代的な個人とは異なる人格のあり方を示してきた文化人類学にとつても、じつは「分人 dividual」はとても大切な概念でした。

イギリスの人類学者マリリン・ストラザン（一九四一〜）は、『贈与のジェンダー』のなかで、パプアニューギニアのハーゲン高地では、西洋社会が前提とする「個人」ではなく、いくつもの人格が織り込まれた「分割可能な複合的な人格」

として人間をとらえていると論じています。

パプアニューギニアを含むメラネシア地域には、飼育されたブタを祝祭などで大々的に交換して男性たちが名声を手にする儀礼があります。その儀礼について、人類学者はもっぱら壮麗な交換儀礼に注目するばかりで、ブタを飼育した女性の労働が隠蔽されていると批判されてきました。

ストラザーンは、その批判は個人が労働の産物への権利をもつという西洋近代の個人主義にもとづいた見方で、<sup>⑥</sup> 現地のとらえ方とは違々と反論します。ハーゲンの人びとは、あらゆるものが個人によって生産されるとは考えておらず、それを人間関係の結果だとみなしている、と。

ブタは個人の労働の産物ではない。男性とブタを育てる女性との婚姻関係、そしてその男性とブタを与えた男性との交換関係に由来する。男性自身も、個人というより、その父親と母親との婚姻関係、あるいは両親が属する氏族間の\*婚資のやりとりといった交換関係の産物である。つまり人間も動物も、つねに複数の社会関係の結果として存在する。ちよつと込み入っていますが、この本でお伝えしたい「つながり」をベースに人間を考える視点と共通したとらえ方です。

ストラザーンは、こうしたハーゲンの人びとの人格は、\*潜在的に複数の社会関係の源へとたどれるもので、その「分人」のなかの特定の人格が贈り物の交換などをおして可視化されるのだと主張しました。

ストラザーンの文章は難解なことでも有名ですが、この「分人」は、メラネシア地域では西洋とは正反対に人格をとらえているというよりも、どこであれ<sup>⑦</sup> 近代社会が前提とする「個人」とは対照的な人格のとらえ方がありうることを提示した概念だとされています。

ハーゲンの人たちとまったく同じではないにせよ、私たちも「個人」としてだけでなく、「分人」として生きている。そうした視点で世の中をとらえると、見えてくるものがたくさんある。パプアニューギニアの事例について聞かされても、自分たちとは無関係な話だと思いかもしれません。でも、じつはこうした文化人類学の研究から私たちにとって意味のある視点を取り出すこともできるのです。

さきほど説明したように、状況や相手との関係性に応じて「わたし」が変化するという見方も、まさに「分人」的な人間のとらえ方です。潜在的には、「わたし」のなかに複数の人間関係にねざした「わたし」がいる。だれと出会うか、どんな場所に身をおくかによって、別の「わたし」が引き出される。

ここで重要なのは、他者によって引き出されるという点です。それは「わたし」が意図的に異なる役を演じ分けているとは違います。他者との「つながり」を原点にして「わたし」をとらえる見方です。

⑧ 「人とは違う個性が大切だ」とか、「自分らしい生き方をしろ」といったメッセージが世の中にはあふれています。でも「わたし」は「わたし」だけでつくりあげるものではない。たぶん、自分のなかをどれだけ掘り下げても、個性とか、自分らしさには到達できない。

他者との「つながり」によって「わたし」の輪郭がつくりだされ、同時にその輪郭から「はみだす」動きが変化へと導いていく。だとしたら、どんな他者と出会うかが重要な鍵になる。

「わたし」をつくりあげている輪郭は、やわらかな膜のようなもので、他者との交わりのなかで互いにはみだしながら、浸透しあう柔軟なもの。そうとらえると、少し気が楽になりませんか？

もちろんその「他者」は生きている人間だけとは限りません。身の回りの動植物かもしれませんし、本や映画、絵画などの作品かもしれません。いずれにしても、文化人類学の視点には、そんな広い意味の他者に「わたし」や「わたしたち」が支えられているという自覚があります。

この本でこうした「つながり」をベースにした人間観を考えてきたのは、その見方のほうが「正しい」と言いたいからではありません。ひとつの見方よりも、複数の見方を手にしていたほうが、「わたし」も「わたしたち」もともに生きやすくなるのではないかと考えているからです。複数の視点をたずさえておくこと。それこそが文化人類学的な知の技法の鍵でもあります。

(松村 まつむら 圭一郎 けいいちろう 『はみだしの人類学 ともに生きる方法』 NHK出版 学びのきほん)

〈注〉 \*婚資……………花婿または花婿の親族が、花嫁の親族に対して贈る財産。

\*潜在的……………外側には表れないが、内側にひそんで存在すること。

問一 〓 線部①「ポジティブ」・②「キャラクター」の意味として、最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① ポジティブ

- ア 発展的な様子
- イ 断定的な様子
- ウ 活動的な様子
- エ 肯定的な様子
- オ 楽天的な様子

② キャラクター

- ア 性格
- イ 外見
- ウ 話し方
- エ 趣味
- オ くせ

問二 〓 線部①「そんな意識が私たちにはありません」とありますが、「そんな意識」を私たちが持ち続けることができるのはなぜですか。解答欄の「日本人が入れ替わり、日本人の暮らしが変わっても、」のあとに続くように、本文から三十字以内で抜き出し、初めと終わりの四字ずつを書きなさい。

問三 〓 線部②「『日本人』」としてのまとまりは無視されます」とありますが、「日本人」としてのまとまりが無視されるのは、ここではどのようなことについて考えるときだと筆者は述べていますか。答えなさい。

問四 〓 線部③「『わたし』という存在」とありますが、筆者は「『わたし』という存在」はどのようにしてできあがるものだと考えていますか。答えなさい。

問五 〓 線部④「私たちは複数の『わたし』を生きています」とありますが、それはどういうことですか。挙げられている具体的な事例を含めて説明しなさい。

問六 ——線部⑤「この西洋近代的な個人」とありますが、「西洋近代的な個人」とはどのようなものですか、解答欄の「もの」に続くように、本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問七 ——線部⑥「現地のとらえ方とは違う」とありますが、ハーゲン高地のブタの交換儀礼は、「現地のとらえ方」ではどのようにとらえられていますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 人間も動物も、複数の社会の結果として存在するのであり、名声などには真の価値がないととらえられている。

イ 一見男性が名声を手に行っているように見えるが、実はそのブタを飼育した女性への称賛である<sup>しょうぼう</sup>ととらえられている。

ウ 男性が得た名声は、男性個人にはなく父母や属する氏族に与えられたものなので、喜ぶべきではないととらえられている。

エ 男性は婚姻関係を持つ女性との組み合わせとして扱われ、男性への名声は女性への名声でもあるととらえられている。

オ 男性が手にした名声は男性個人のものではなく、男性やブタと関わるすべての人間関係の結果としてとらえられている。

問八 ——線部⑦「近代社会が前提とする『個人』とは対照的な人格のとらえ方」とありますが、これは「わたし」はどのようなものであるとするととらえ方ですか。解答欄の「『わたし』は」のあとに続くようにして答えなさい。

問九 ——線部⑧「『わたし』は『わたし』だけでつくりあげるものではない」とありますが、どのように考えられるのはなぜですか。理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」は、自分の中にいる人間関係にねざした複数の「わたし」が、他者とのつながりの中でそれぞれ対応した役割を意図的に演じ分けることによってつくりあげるものだから。

イ 「わたし」は、自分の個性や自分らしさから導き出されるのではなく、「わたし」と他者との交わりの中で輪郭がつくりだされることによって、自然につくりあげられるものだから。

ウ 「わたし」は、「わたし」という確定したものがあってはならず、他者とのつながりによって「わたし」の輪郭がつくりだされ、他者との交わりの中で互いにはみだしながらかつくりあげられるものだから。

エ 「わたし」は、潜在的に自分の中に存在する人とは違う個性が、だれと出会うか、どんな場所に身をおくかによって抑えこまれ、その反動で自分の輪郭をはみだすことでつくりあげられるものだから。

オ 「わたし」は、状況や相手との関係性に関わりなく存在するものではあるが、他者と出会う中でより自分らしく、人とは違う個性を持つものへと変化することによってつくりあげられるものだから。



問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

だれもない教室はだだっ広かった。

みんなは朝六時に校庭に集合して、七時過ぎには出発したはずだ。今ごろは電車の中で、はしゃいで通勤客にらまれたり、あからさまにいやな顔をされているだろう。それがまた面白くて、おし合いへし合いしながら、くすくす笑ったりしているにちがいない。

見送りをしなくてすんで、ほっとする。見えなければ、①たいていのことはがまんできる。

がらんとした教室で、三田口は机に両足を投げだし、アンパンを食べていた。

「出席とつたら、あとはもう用はねえよ。あ、給食は食いにもどつてくる」

アンパンの空き袋は丸めて勢いよく天井に投げつけた。袋は蛍光灯に当たつてから、教壇の向こう側へ飛んでいった。家庭科の先生がろうかをバタバタ走つてきて、ぼくたちの名前を確認すると自習用のプリントを置いていった。

「あなたたち、図書室へ移動してね。きょうあしたは、司書の先生がずっといてくださるから」

三田口は机の上の足をそのままに、「はい——っ」と答えた。

……中略……

図書館はがらんとしていた。

あとからほかのクラスからも、だれか来るのだろうか……。

どんな理由にせよ、修学旅行に行けなかったのはもしかしたら三田口とぼくだけなのかもしれない、と思うと胸がちくりとした。

いや、出席とるためだけに、わざわざ出てくるやつなんているか？ そうも思った。

ぼくたちがのそのそ入っていくと、カウンターのの中から司書の先生が手招きしている。

「はい、どうぞ。どれでも好きなのを取っていいわよ。ただし、ひとつずつね」

ドーナツの入った箱を見せた。

「本を読みながら食べるのは禁止だからね」

「おお、すげえ。先生、気がきくじゃん。じゃ、おれはこれ」

三田口がさつそくチョコレートをついたドーナツに手を伸ばす。

「六年生の先生たちからよ」

「ちえつ、そういうことか。かわいいそうにつてか」

一瞬、気まずい空気が流れたが、三田口は手づかみのドーナツをその場でむしゃむしゃ食べると、

「ま、うまいから許してやる」

と、言つて短パンに指をこすりつけた。

先生は、すかさずウエットティシューをわたした。

「うん、おいしいよね。わたしもチョコが一番好きかな。あなたは？」

「じゃあ、ぼくもチョコにします」

「はい、どうぞ」

ぼくは伸ばした手を、ふと止めた。

「あのう、家に持つて帰つてもいいですか？」

美咲に分けてやつたら、きつと喜ぶだろう。

「ん？ ええ、もちろんよ。つつんであげましょうか？」

「はい」

「なんだ、妹にやるのか？ きえー、美しい兄妹愛」

三田口がちゃかした。はずかしかった。

「あ、そういうことね。じゃあ、特別よ。もうひとつ選んでいいわ」

ぼくはびっくりして先生を見上げた。

「足りなくなりませんか？」

先生は かぶりをふつた。

「だいじょうぶよ。もうひとつも同じのにする?」

「えーっと、じゃあ、イチゴにします」

先生はカウンターの下からペーパータオルを出して、チョコとイチゴ味のドーナツをていねいにつつんでくれる。それを見下ろしながら、三田口がわざとなれなれしいそぶりです。カウンターのにもたれかかった。

「先生、ぼくはあ、家に弟と妹と、それに犬もいるんですけどお」

……中略……

「いいよ、全部食べて。ぼくは学校でもらったから」

そう言えば、二つとも美咲にやることができる。

だが、美咲はほうちようを取ってきて、ドーナツを切り分けた。ちょうど半分になるように、ていねいに、ていねいに。

② 両方の味を半分ずつ食べよ」

「じゃあ」

美咲は大事に、大事に、少しずつ口に運ぶ。

「お兄ちゃん、おいしいね」

この瞬間、修学旅行を断ったかいがあつた、と思つた。

ちよつと気持ちがあつたから、三田口がいもしない弟と妹、それに犬まで持ち出してドーナツを二重取りしようとしたこと、残念ながら先生はだまされなかつたことを面白おかしく話してやつた。

「ジョニーって言ったの、犬の名前?」

「うん。ほかに思いつかないでやんの」

美咲は笑つてから、首をかしげあこがれの目を泳がせた。

「犬、ほしいなあ。」

学校から帰るとき、あたし、毎日ポストのある道を通るの。大きな犬のいる、大きなおうちがあるから。その犬もジョニーっていうんだよ。頭をなでてやると、目がどんどん細くなるの。すごーく大きな白い犬。知ってる?

犬、ほしいなあ。いつか飼つてもらえるかなあ」

答えられなかった。答えがわからないからじゃない。わかっているからだ。シヨックだった。

わざわざより道して、白い犬をなでている美咲が目に見えるようで。今までそれをだまっていたなんて。

ぼくはより道をするのではない。先に帰っている美咲を少しでもひとりにしておきたくないからだ。最短距離を、まっすぐ走るように帰ってくる。兄としての責任がある。不自由を感じたことがない、と言ったらうそになるが、だれもない部屋に帰っている美咲のさびしさや心細さは想像がつく。

いや、想像以上だったのだ。だからこそ、③ 遠回りをしてまで犬をなでてくるのだ。

ぼくは無理にもシヨックをふりはらって言った。

「かまれないように気をつけろよ」

「ううん、だいじょうぶ。大きな犬はおっとりしてて、小さい犬より優しいんだって。かんたりにしないよ」

「大きいって、どのくらい？」

「うーん、このテーブルより大きいかな」

「うそー」

美咲はドーナツがのったテーブルをあらためて目で測り、断言した。

「ほんと。うん、もつと大きい」

ぼくはふと、その犬は本当にいるのだろうか、と疑った。美咲はさびしさのあまり、空想の世界で、自分が作り上げた犬と遊んでいるんじゃないか、と……。

ぞっとした。

話題を変えたかった。

「ほら、ドーナツ、食べちゃいな」

「うん……」

いつの間にか、美咲の顔からつきままでの笑みが消えていた。なんだか気が進まないようだ。

「ちよつと、おなかが痛い」

「えつ、ドーナツ食べたから？ くさつてなんかいないよね。ぼくはなんともないけど」

「ちがう。学校にいるときも、ちよつと痛かった」

「医務室は？ 行つたの？」

美咲はかぶりをふつた。

「がまんしてれば治るから」

「いつから？」

「うーん、いつからつて。何日か前」

ぼくは、小さな額に思わず手を当てていた。少し熱っぽい気もするが、たいしたことはない。

そもそも美咲は体がじょうぶではなかった。しょっちゅう気持ちが悪いとか、頭やおなかが痛いなどとうつたえる。

小さいときのことは覚えていない。が、美咲がこんなふうになったのは、父さんと母さんが離婚してからのような気がする。まだまだ親に甘えたい年ごろなのに、母さんはいつも留守だ。

「横になる？ 布団、しいてやろうか？」

美咲は素直に、「うん」と目をふせた。

布団に寝かせ、厚みのない体にタオルケットをかけてやってから、ぼくは常備薬の入った箱を探った。取り出した整腸剤のびんを耳元でふつてみる。まだ少し残っていた。

「これ飲むと、いつもよくなるじゃん」

水を入れたコップといっしょに錠剤を差し出すと、美咲は頭を上げて、「うん」と、うなずいた。

……中略……

修学旅行の余韻が残る教室で、ぼくは異次元のカプセルにくるまされたようになって、すわり続けた。授業をする先生の声や、生徒たちのにぎやかな思ひ出話、<sup>④</sup> <sup>⑤</sup> そぞろ歩く足音や空気のゆらぎ。全てがぼくを避けて流れていった。

先生から聞いて、<sup>④</sup> みんなは知っているのだろう。だからこそ、だれもふれてはこないのだ。放っておいてくれるのだ。何よりの心づかいじゃないか。

ある日の下校時のことだった。うつむいてひとり歩く校庭で、つつと三田口が横に並んできた。ぼくはちよつと顔を横に向けたが、三田口は前を向いたままだ。二人とも、そのままだまって校門を目ざした。

「おれさ……」

校門のすぐ手前まできたころ、ようやく三田口は口を開いた。

「おまえがうらやましかった。妹がいて。」

いつも気にしてたじゃん。ひとりじゃないんだな、って思った。ドーナツだつてさ、持って帰ったじゃん」

つぎの瞬間、わきあがった声が自分の泣き声だとは信じられなかった。

突然、<sup>㊤</sup>せきを切つたように涙があふれ出て、止めようもなかった。赤ん坊のように、手放しで、声を上げて泣いた。

三田口はあわててぼくの腕をとると、校庭のすみへひっぱっていった。

ぼくは場所も選ばずすわりこみ、ひざに顔をうずめて泣き続けた。後にも先にも、こんなに泣いたことはなかった。

五分？ いや、十分？

ずいぶん泣き続けてから、ようやく腕で涙をぬぐってふり返ると、三田口は地面に腰をおろし足を投げだして、背中からずり上がったランドセルに頭をもたせかけていた。夏らしさの増した青空を見上げていた。

ふと三田口の目もぬれているような気がしたが、ぼくの涙のせいだろう。

三田口は地面にひじをつけて、ごろりとぼくの方へ体をかたむけると、「氣、すんだ？」と、聞いた。うなずくしかなかった。

「おれも泣いたことある。おふくろが死んだとき。」

泣いて、泣いて……。最後には引きつけ起こしてさ。病院に運ばれたんだ。勝ったな」

こんなときに、勝った、負けたなんて、いかにも三田口らしい。ぼくは、口のはしだけで笑った。

「なあ、どう思う？」

三田口は、また視線を空にもどして言った。

「おまえには妹がいた。その妹が死んじゃって、悲しくて泣いてる。じゃあ、悲しくないように、泣かなくてすむように、最初から妹なんかいない方が良かった？」

「えっ？」

意外すぎる問いかけに、息をのんだ。

最初から？ 美咲がいない？

ぼくは言葉もなく、激しく頭をふった。

「だよな。なくて悲しいものはさ、持ってたっただけで恵まれてた。だろ？」

おふくろが死んでから、何年もかかってたどりついた、おれの人生哲学。まいったか」

勝ちほこったような口ぶりだが、同時にあきらめたような、さびしげな三田口を、ぼくはぼう然と見つめた。それから、小さくうなずいた。

「もう行こうぜ」

三田口はごろつとうつぶせになってから、ぴよんと立ち上がった。ぼくも地面に手をつけて、のそつと立ち上がった。手のひらに地面のほてりが残った。午後の直射日光が照りつける校庭で、三田口はがまん強くつきあってくれたのだ。

ぼくは小声で、「ありがとう」と、言った。

三田口の言う通りにちがいない。でも、⑤ 頭ではわかってても、心でわかるまでには、気が遠くなるほどの時間がかかるだろう。

いや、そんな日なんて来るのだろうか。

ある日「ぼく」は学校帰りに通学路からそれ、初めて通る道を歩いていると、偶然目立たないポストの存在に気づく。そこで美咲の「あたし、毎日ポストのある道を通るの。大きな犬のいる、大きなおうちがあるから」という言葉を思い出す。一軒一軒探し、ついに「大きなおうち」を見つける。そこには「大きな白い犬」もいた。家の主は「梅本さん」という高齢の女性で、美咲がしばらく顔を見せていないことを気にしていた。「ぼく」は「梅本さん」に美咲が亡くなったことを伝えた。

すると、梅本さんの口から意外な言葉がもれた。

「⑥ 七月の初めでしょう？ もしかしたら、五日じゃない？」

ぼくはびっくりして、返事もできなかった。

「ジョニーはいつもガラス戸——さっきわたしが出てきたあそこね。あそこから道路の方を見て、美咲ちゃんを通るのを待っていたのよ。そのころには庭に出してやることも多かったわ。ジョニーは美咲ちゃんが学校から帰る時間を知っていたし、土日や雨の日はここを通らないのもわかっていてね。」

七月の初めに、待っていても来ない日が二、三日あったわ。そして、五日のことよ。いつものようにずっと待っていたのに、そのうち急にくるようになったようにほえだしたの。家じゅうをかけ回りながらほえ続けて。そんなこと、今まで一度もなかった。

しばらくしてようやく落ち着いたら、もう待つのをやめてしまったの。つぎの日も、そのつぎの日も。それからずっと。

美咲ちゃんは今もう来ないって、ジョニーはわかったのよ」

ぼくはぼう然とジョニーを、それから梅本さんを見つめた。

「あとう、それって、美咲とジョニーは気持ちがすぐく通じあっていたってことですか？」

「ええ、きつとね。そこまでは、わたしも知らなかったわ。」

二年前に主人が出先で亡くなったときだって、そんなことはなかったわ。ブリーダーを訪ねて行って、ほれこんでこの子を飼ったのは主人だったのに」

口元にちよつとしわのよつたほえみは痛々しげでさえあった。

ぼくはあらためてジョニーの頭に手を置いた。手のひらでそつと丸い頭をつつむように。

「美咲はジョニーといっしょのとき、楽しそうでしたか？」

「ええ、とつても。いつもにこにこ笑っていましたよ。お母さんとお兄ちゃんのことを話してくれるときもですよ。」

ご家庭の事情はそれとなくわかりました。でも、美咲ちゃんはとても幸せそうで、いつも笑顔でした。お兄ちゃんのこと、とてもごじまんですね。ギターがとても上手なんですつてね。澤口常一の不二見小バンドにも入っているつて。

コンサートは十一月でしたつて？」

言葉につまった。

答えたくないからじゃない。突然、涙でのががふさがってしまったからだ。思わず両手で目をおおった。声を出さずに泣



いた。

のどがひくひくするたびに、手のひらにジヨニーのおいがした。初めてかぐのに、なつかしい犬のおいだった。

美咲みさきという名前は父さんがつけたという。読んで字のごとく、美しく咲さいてほしい、と願ねがったことだろう。なのに、美咲はつぼみのまま、咲くこともなく散ちってしまった。

かわいそうで、かわいそうで、しかたがなかった。毎日みじめでやりきれない気分だった。でも、⑦ ジヨニーに会い、期せずして飼かい主ぬしの梅本さんと言葉を交かわしてから、ふっと気持ちが軽かくなった。ほんの少しだけ、救すくわれたような気がした。

ぼくは父さんと暮くらしたころのことをよく覚えている。思い出さないにはしているけど。美咲は小さかったから、ほとんど覚えていないのかもしれない、と気がついた。だから、父さんのいない生活を当たり前だと思おもっていたのかもしれない。

もちろん、貧まずしいのはわかってる。テレビだつてとうにこわれて見えなくなったのに、修理しゆりもせず、買かい替えもせず、そのままになっている。学校で人気番組が話題になつても、友ともたちと話を合あわすのに苦労くろうしたにちがいない。ぼくだつてそうだから。ゲームはもちろん、女の子らしいかわいい洋服よふくや文具ぶんぐ、はやりのちよつとしたグッズなんかもがまんしなければならなかった。学童がくどう保育ほいくにも行いかず、下校がくこうしてからはひとりで留守番るすばんだつた。

でも、美咲みさきはじゅうぶん幸せしあわせだったのかもしれない。

そう思った。

少なくとも、ジヨニーと遊あそんでいる間は。

ぼくとドーナツを分けあつた瞬間しゆんかんは。

リクエストした曲を、ぼくがギターで弾ひいてやったひと時は。

そんな小さな時間の積み重ねが、きつといっぱい、いっぱい、あつただろう。

そう信まじることにした。

それは、⑧ ぼく自身にも当てはまるはずだから……。

問一 〓線部①「かぶりをふった」・②「そぞろ歩く」・③「せきを切った」の意味として、最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① かぶりをふった

- ア 身体を大きく動かし、楽しそうにした
- イ 頭を前後にゆらし、肯定した
- ウ 首を横に傾け、疑問の思いを示した
- エ 頭を左右に動かし、否定した
- オ 両手をゆっくり広げて、安心させた

② そぞろ歩く

- ア ゆっくり歩き回る
- イ あちこち歩き回る
- ウ あわただしく歩き回る
- エ 音を立てずに歩き回る
- オ 集団で歩き回る

③ せきを切った

- ア たまっていたものが一気に出る
- イ むせてせきが止まらなくなる
- ウ 緊張から解き放たれる
- エ イスから崩れ落ちる
- オ ゆっくりと流れ出す

問二 —— 線部①「たいていのことはがまんできる」とありますが、ここではどのような思いを「がまん」できるといいますか。答えなさい。

問三 —— 線部②「両方の味を半分ずつ食べよ」とありますが、このように言った時の美咲の心情として考えられないもの、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア せっかく二種類あるのだから両方のドーナツの味を味わいたいという気持ち。

イ 兄が修学旅行に行かず、自分と一緒にいてくれることをありがたく思う気持ち。

ウ ドーナツを二つも食べたからおなかが痛くなるのではないかと不安に思う気持ち。

エ わざわざもらってきてくれたドーナツを兄と分け合って食べたいという気持ち。

オ 兄がもらってきたものを一人だけで食べてしまうのは申し訳ないという気持ち。

問四 —— 線部③「遠回りをしてまで犬をなでてくるのだ」とありますが、美咲がこのようにしていた理由を、この時の「ぼく」はどう考えていましたか。答えなさい。

問五 —— 線部④「みんなは知っているのだろう」とありますが、「みんな」は何を「知っている」のですか。答えなさい。

問六 —— 線部⑤「頭ではわかってても、心でわかるまでには、気が遠くなるほどの時間がかかるだろう」とありますが、具体的に何が分かるというのですか。答えなさい。

問七 —— 線部⑥「七月の初めでしょう？もしかしたら、五日じゃない？」とありますが、梅本さんはなぜ美咲の亡くなった日を言い当てることができたのですか。答えなさい。

問八 ——線部⑦「ジョニーに会い、期せずして飼い主の梅本さんと言葉を交わしてから、ふつと気持ちが軽くなった」とありますが、美咲とジョニーの関わりを知ったことで「ぼく」の気持ちが少しだけ軽くなったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 貧しくて犬を飼えずにさみしがっていた美咲が、ジョニーと出会うことで、犬を飼うという願っていたことに近い経験をしていたのだと気づいたから。

イ 美咲がさびしさのあまり空想の世界で大きな犬と遊んでいるのではないかと心配していたが、その犬が実際にいたことがはつきり分かったから。

ウ 美咲とジョニーが心を通い合わせていたことを知って、自分だけが美咲のことを支えていたわけではなかったということに気づかされたから。

エ ジョニーも美咲の死を悲しんでいたことを知って、自分の中だけにあると思っていた美咲が亡くなった悲しみを他の人とも共有できたから。

オ さびしさや心細さを一人でがまんして生きていたと思っていた美咲にも、心が通じる相手がいいて、実は幸せな時間もあったのだということが分かったから。

問九 ——線部⑧「ぼく自身にも当てはまるはずだから……」とありますが、どのようなことが当てはまるのでしょうか。答えなさい。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① この交差点は車のオウライが激しいので特に注意が必要だ。
- ② 勝手に部屋に入られて以来、兄との関係がケンアクになった。
- ③ 防犯のため、家の外壁にコガタのカメラを取り付けた。
- ④ 夏休み期間中、学校のプールは地域の人にカイホウされる。
- ⑤ よく調べて私の身がケツパクであることを証明してほしい。
- ⑥ 笑いの絶えない幸せな家庭を築くことを約束しよう。
- ⑦ 一刻も早く家に帰り、シャワーを浴びて一眠りしたい。
- ⑧ 先生はきびしい口調で生徒たちの校則違反をとがめた。
- ⑨ 最近、父が営むカレー屋に行列ができるようになった。
- ⑩ 友人は気象予報士になるための勉強にはげんでいる。

問題四

次の①～⑩の慣用表現の□にあてはまる生き物を、後のア～シから選び、それぞれ記号で答えなさい。  
 一つの文に□が二つある場合は、二つとも同じものが入ります。

① 二□を追う者は一□をも得ず

② □の耳に念仏

③ 取らぬ□の皮算用

④ 負け□の遠吠え

⑤ □も木から落ちる

⑥ 虎の威を借る□

⑦ 能ある□は爪を隠す

⑧ 窮鼠□をかむ

⑨ 泣きつ面に□

⑩ 蛇ににらまれた□

- |                     |                      |                     |                     |   |   |                     |                     |   |   |                      |                      |
|---------------------|----------------------|---------------------|---------------------|---|---|---------------------|---------------------|---|---|----------------------|----------------------|
| キ                   | ア                    | ク                   | イ                   | ケ | ウ | コ                   | エ                   | サ | オ | シ                    | カ                    |
| 兎 <small>うは</small> | 蛙 <small>かえる</small> | 猫 <small>ねこ</small> | 蜂 <small>はち</small> | 馬 | 羊 | 鷹 <small>たか</small> | 猿 <small>さる</small> | 犬 | 牛 | 狸 <small>たぬき</small> | 狐 <small>きつね</small> |

問題五

次の①～⑤の——線部と同じ働きをしているものを、それぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

① 教科書を机の上に置く。

- ア 兄は弁護士になった。  
イ 友だちにマンガを借りた。  
ウ ようやく静かになった。  
エ 妹は保育園に通っている。  
オ 今日は泣きに泣いた。

② 朝早くに雨が降った。

- ア 飼猫を弟が逃がした。  
イ 目立たないが力はある。  
ウ 雪も強いが風も強い。  
エ 悪い話だが聞いてもらおう。  
オ 喜んでくれたら良いがなあ。

③ この家は木できています。

- ア この上着は千円で買った。  
イ 氷で作った像を飾る。  
ウ 駅まで自転車で行く。  
エ 一緒に公園で遊ぼう。  
オ 病気で学校を休む。

④ 朝ごはんはもう食べましたか。

ア その練習量で勝てようか。  
イ こんなにうれしいのか。  
ウ そういう君は誰だれですか。  
エ あなたも参加しませんか。  
オ 好きなのはパンかごはんか。

⑤ 私は普連土学園の生徒です。

ア 私は走るのが好きです。  
イ もう宿題は済んだの。  
ウ 何のかのと言いつをする。  
エ 星の降る夜に出会う。  
オ 兄の本を借りている。



(以下余白)